

## 金沢大学十全医学会会長就任挨拶

平成25年1月1日をもって、井上正樹会長の後任として金沢大学十全医学会会長を拝命いたしました太田哲生です。大変光栄に存じますとともに、責任の重さに身の引き締まる思いであります。私は昭和48年3月に石川県立飯田高等学校を卒業し、同年4月に金沢大学医学部に入学いたしました。昭和54年3月に同大学を卒業後、ただちに金沢大学医学部第二外科学教室に入局しております。同教室で、故宮崎逸夫教授、三輪晃一前教授の薫陶を受け、平成18年からは消化器・乳腺・移植再生外科学教室の第7代目教授として、「伝統の継承と革新の継続」を肝に銘じながら、この7年間教室の運営にあたってきました。また、平成20年4月からは富田勝郎病院長の補佐役として副院長(病院広報・地域医療連携担当)を5年間勤めて参りました。この度は、はからずも歴史と伝統のある金沢大学十全医学会の会長にご推挙いただき、これをお引き受けすることになりました。微力ながら、十全医学会の発展のために努力する所存ですので、何卒ご指導・ご支援・ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

さて、皆様方もご存知のように、1862(文久2)年開設の加賀藩彦三種痘所に始まる金沢大学医学部150周年を祝う記念式典・記念講演会・記念祝賀会、さらに「医学の源流・未来への継承」と記された金沢医学館1期生9人の銅像の除幕式が、多くの関係者の参加のもと昨年7月7日(土)十全講堂ならびに医学類キャンパス内で盛大に執り行われました。その式典のなかで、山本 健医学類長は、彦三種痘所や1870(明治3)年設立の金沢医学館など金大医学類の源流となった施設の紹介に加え、150年の間に本学関係者によって成し遂げられた国家的榮譽とも言える数々の業績(9名の日本学士院賞受賞者：上坂熊勝先生、桂田富士郎先生、岡本肇先生、井関尚栄先生、岡本 宏先生、古畑種基先生、久留 勝先生、岩崎 憲先生、大村 裕先生ならびに文化功労者顕彰受賞者の遠藤 彰先生)についても言及され、本学の後進が時代の変遷とともに着実な発展を遂げ、上述した諸先輩に続く国家的榮譽を継続して得られるよう、祈念しているとの式辞を述べられました。また、奇しくも50年前の金沢大学医学部が創立100周年を迎えた昭和37年に本学医学部に入学されました中村信一金沢大学長は、天野貞祐先生(哲学者で獨協大学初代学長)や沖中重雄先生(金沢市生まれ、44歳で東京帝国大学医学部第3内科教授に就任)の名言を引用しながら、「医学部の歩んだ歴史は、伝統とその継承という一方の鎖を途切らせることなく、他方、創造と改革に不断に取り組んで新しい鎖をつくってきた、伝統と創造の二重らせんの形成の歴史であったといえます。このように、連綿と紡がれてきた伝統と創造の二重らせんが健全な伸長を遂げつつ、今後も十全の名にふさわしい業績を積んでいかれることを心より願いたします」と、祝辞を述べられました。また、「十ながら全(いや)す」と読み下す「十全」の二文字は、1895(明治28)年に第四高等学校医学部の教職員や学生が渾然一体となって結成した会の名に冠せられ、その後昭和に入り、学術研究を推進し成果を発表する十全医学会、母校の応援団としての十全同窓会等が組織され、今日に至っていることも祝辞のなかで紹介されました。

このような時代的変遷のなかで、金沢大学十全医学会の活動として、①十全医学会学術集会の開催、②十全医学賞(平成16年度から現在まで11名の先生方に授与)の選考、③会員が主催する学術集会(学会・研究会・シンポジウム・フォーラム・講演会等)への経済的支援、④金沢大学十全医学会雑誌(第四高等学校医学部十全会雑誌第1号が明治29年11月25日に発行され、今日に至る)の発行等の業務をおこない、常に「学術研究の推進と成果発表」ならびに「会員相互間の親睦を図る」という重要な役割を担ってきました。今後は、これまでの活動内容を踏襲しながらも、近未来における医療を見据えての「変革と創造のサイエンスを探究していく研究」を奨励し、積極的に支援していきたいと考えていますので、会員諸氏のご理解とご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、会員諸氏のご健勝と今後益々のご発展を心よりお祈り申し上げるとともに、沖中重雄先生が現役最後の臨床講義(1963年)で学生に贈った名言の一節を紹介しまして、私の会長就任の挨拶とさせていただきます。

「教科書に書かれた医学は過去の医学であり、目前に悩む患者のなかに明日の医学の教科書の中身がある」

金沢大学十全医学会  
会長 太田 哲 生